

のブロードキャスターのアイデアへと発展することになるのである。

1940年代初期には、彼はリッケンバック社で働いていたドク・カフマンと共に「K&Fカンパニー」を創立し、スチール・ギターやアンプの製造を始める。1946年にドク・カフマンは退社してしまふが、会社は「フェンダー・エレクトリック・インストゥルメンツ・カンパニー」として再出発する。レオが、強力なパートナーとなるジョージ・フラートンと出会ったのもこの頃だ。そして、その翌年1947年、彼らはブロードキャスターを完成させたのだ。

こうした経緯を経て発表されたブロードキャスターは、レオの知り合いのランドリー・ミュージシャンたちに愛用され、有名になっていった。このブロードキャスターは12週間には5本のベースで生産されていたが、約半年後にはネーミングが変更されることになる。グレッグが同名のドラムセットを発表していたので、ドラムを避けるためというのがその理由だったようだ。そして、当時斬新だった「プレジジョン」になんて、新たに「テレキャスター」と名付けられることになる。とはいえず、1950年代中頃から徐々に行われるマイナーチェンジ以前のモデルは、ブロードキャスターと同一仕様であり、この54年までのテレキャスターが貴重なコレクターズ・アイテムとなっているわけだ。

さて、そのマイナーチェンジだが、まず54年になると黒のワンプライのピックガードに加えて、白のワンプライのものが出てくる。そして、ブリッジ・サドルがプラスチック製のものをスチール製のものへと変更される。さらに、ピックアップもポールピースの高さが不均等なタイプのものになる。ネックブリッジも、オリジナル仕様のVシェイプから、UシェイプまたはC-ネックなどと呼ばれるタイプのものに変更される。

そして60年代に入ると、メイプル・ワンピースネックから、ローズ指板を貼り合わせたアンビー

スネックへ代わっている。ピックガードも白→黒の3プライのものになる。さらに、スウィッチノブも現在のモデルと同じようなひしきがついた帽子型のものが採用されるようになる。

1951

さて、大好評を博したブロードキャスター/テレキャスターに続いて、レオ・ウェンダーたちはエレクトリック・ベースを開発したのである。1951年に発表されたこのベースは、それまでのベースの概念をくつがえすかのようなものだったが、その特徴（「本質」と呼んでも良いかも知れない）は次の2点に集約することができる。すなわち、ウッドベースの巨大なボディを連想するのが難しいほどコンパクトにまとめられ、さらにそのベースの指板にはフレットが打ち込まれていたのだ。そして、フレットによって正確な音程を生み出すという意味合いで、このベースは「プレジジョン（正確）ベース」と命名された。

ボディのサイズは持ち運びの便宜を考慮してのものだったし、ポリウレタンは他の楽器とのアンサンブル上の問題になっていただけで、フレットは、ギタリストがベースを兼任するのが日常茶飯事であった等、このベースは当時の音楽状況の要求を満たすべく開発されたのである。この、時代の要求とレオの天才の組み合わせにより開花した「コンプスの顔」というべきエレクトリック・ベースは、やがてそれ自身が音楽を変えていくことになるのである。当時の音楽の世界でいかにフェンダーベースが画期的だったかを語るエピソードがある。

アメリカに、ミュージシャン・ユニオン（組合）があるが、その当時の名簿を見ると、パート分類に「ピアニスト」、「ギタリスト」などと並んで「フェンダー・ベース」という項があるのだ。このことひとつでもプレジジョンベースが新しい概念を作り出してしまったということは明白だ。先にテレキャスターの出現を「革命」と言ったが、プレジジョンベースのデビューが「革命」の要諦はより強いものであったと言える。

そのプレジジョンベース、オリジナル・モデルはボディシェイプがいい、ヘッドストックといくテレキャスターの流れをくみデザインであったが、徐々にマイナー・チェンジが施される。まず54年には、その年に発表されるストラキャスターのような「コムフォート・コンタクト・ボディ」つまり、ボディ・エッジの厚みや体が当たる部分にカットを施したものになる。そしてピックガードは黒のワンプライのものに変更、カラーもブラウンと黄色のサンバーストが標準となる。

1957

そして、1957年になると大幅なモデルチェンジが行われる。まず、それまでのシングルコイルのピックアップが、スプリット・コイルのものに変更される。そして同時に、それまで別々だったピックガードとコントロールプレートは1つにまとめられ、材質もアルミニウムに変更されている。それまでボディ・サイドにあったジャックもピックガード上にレイアウトされた。さらに、ヘッドストックも、それまでのテレキャスタータイプのものから、ストラキャスタータイプのデザインのものに変更された。その後、「59年から60年にかけて、フインガーボードがローズウッドに変更され、ピックガードもアルミのものに代わって3プライのプラスチックになるが、57年にプレジジョンベ

ースはそのスタイルを完成したと言っても良いだろう。

この当時のフェンダーの躍進は、工場規模の拡大過程からもうかがうことができる。1946年当時360スクエアフィート（従業員15名）だったのが、1949年には540スクエアフィート（同25名）、そして1954年には2000スクエアフィート（同50名）と確実に成長している。

1954

さらにその1954年には、レオ・フェンダーの良きパートナーとして有名なかのフレディ・タハレスが参加している。そして、彼を加えたフェンダーはその年、テレキャスター、プレジジョンベースに続く、画期的な楽器第4号、ギターを発表する。言うまでもなくストラキャスターである。レオ・フェンダーの構想のもと、1951年に製作を開始されたこのギターは、フレディ・タハレスにより細かな修正を加えられ、1953年に完成し、翌54年、市場に送り出されることとなる。

3ピックアップも当時としては斬新なものであったが、このギターの魅力の焦点はやはりその「シンクロナイズド・トremolo」にある。ブリッジとテイルピースを一体化してしまっただけでネック全体が6本のスタチューを支点として動くという機構は、従来のトremoloユニットに比べ無駄な動き（ブリッジ・テイルピース間の弦の移動etc.）を極端に低減していることが、アームに加えた力をストレートに弦に伝えることができるのである。そのため、チューニングの狂いが小さいこともできる。大きな音程変化が得られるようになった。今をときめく（フロイドローズのユニットも基本構造は同じであるということひとつをとって）でも、「シンクロナイズド・トremolo」の機構がシンプルでありながら優秀な1の

だということが分かる。ストラキャスターの特徴は他にもある。ミュージシャンの体にピッタリフィットするようにボディエッジにカットを施された「コムフォート・コンタクト・ボディ」。さらに、先進の3ピックアップのセレクトスウィッチ——3ウェイ方式だが——が意外なリキックを生み出した。フロントポジションとセンターポジション、或いはリアとセンターの中間点にうまくセットすることにより、アウト・オブ・フェイズ・サウンドが得られるのである。エリク・クラブドンの使用により一躍有名になったこのサウンドが、オールド・ストラキャスターの魅力の一つになっていることは言うまでもない。

1959

さて、このギターについても他のギター同様、やはりマイナーチェンジが行われる。まず、オリジナル仕様のVシェイプのネックブリッジがUシェイプに変更される。そして1959年には、フィニッシュ・カラーのサンバーストが、ブラック・イエローのトーンから、黒にレッドが入ったトーンになる。同じ頃、ピックガードは3プライのものに替えられる。メイプルワンピースネックから、ローズ指板貼りワンピースネック全体が代わったのもこの年である。このローズウッド指板のネックも、52年まではフラット貼り厚みのあるローズウッドを平均3貼ったものだったが、63年以降はラウンド貼り（薄いローズウッドをラウンドに貼って貼ったもの）になる。1953年に、事業の発展という理由から販売部門が独立させられ別会社として設立されたのが「フェンダー・セールス・カンパニー」だが、この会社も工場規模急成長している。ストラキャスターの1955年には社員が50名に増えており、さらにその5年後にはその倍の人数になる。

一方「フェンダー・カンパニー」は1959年には新しい建物の6,000スクエアフィートのフロアを加え、その躍進たるやすまじいものだ。名作「プレジジョンベース」によって、「フェンダーベース」をエレクトリックベースの代名詞にしてしまったフェンダーが、1959年に第3のベース、ジャズベースを発表する。先に紹介した3機種に比べれば、「歴史的価値」はそれほどないかも知れないが、やはり、レオ・フェンダー、フレディ・タハレスが生み出した楽器。しっかりとキャクスターを持っている。「オフセット・ウエスト」と呼ばれる、左右非対称の流れるようなデザインは57年に発表されていたジャズマスターの流れをくむもの。スリムなナロウネックは、プレジジョン製作時の「ギター感覚で弾ける」という構想をさらに一歩進め実現したものだ。

また、発表当時のコントロールがユニークだ。2つのコントロールがそれぞれ2連になっており、内側がボリューム、外側がトーンという内容で、各1個のピックアップをフォローしている。しかし、翌年には2つのコントロールによる2ボリューム、1トーンに変更されている。その内、トーンコントロールのノブだけが小さいのが特徴になっている。

さて、ここまででこの「ライオン・オブ・インディ」は終了するわけだが、この後1965年、レオの健康上の都合により、フェンダー・カンパニーはCBSに売却されることになる。フェンダーが生み出した4機種の名機を中心に「フェンダー創世紀」というものを出してきたわけだが、こうして振り返ってみると改めてフェンダーの業績の偉大さが分かる。テレキャスターがなければあの名器レス・ポールは出現しなかったことだろう。エレクトリック・ギター、ベースだけでなく音楽形態は生じ得なかったであろう。そして、ジムのあのグレイストラがここに……

